

## 円仁の足跡を辿る旅―赤山法華院跡および五台山―

一文字 昭子

はじめに

『日本三代実録』（以下、『三代実録』と記す）巻八、貞観六年（八六四）正月十四日条に天台座主円仁の卒伝がある。これが現存する円仁の伝の中でもっとも古いものといわれている。卒伝には円仁の出自（下野国都賀郡、現在の栃木県栃本市一帯。壬生氏）、誕生時の奇瑞、最澄に出会う予知夢、叡山北での隠棲、入唐へ至った経緯、唐の赤山法華院から五台山巡礼へ至るまで、五台山での奇跡・求法、帰国後文徳天皇・清和天皇、淳和太后（嵯峨皇女、正子内親王）、文徳后藤原明子らの尊崇を受け、七十二歳で卒したことが一六八〇余字に及ぶ漢文で綴られている。

この卒伝の特徴の一つは円仁を彩る奇跡の記述である。現在、

私たちは円仁自身が書き記した『入唐求法巡礼行記』と比較して

この卒伝を読むことができる。『三代実録』は寛平四（八九二）年、宇多天皇の勅命により編纂が始められたので、両者の記述には三十年ほどの開きがあることになる。『入唐求法巡礼行記』は、比較的事実が淡々と綴られるが、これに対して『三代実録』の卒伝は、五台山北台で獅子に出会ったこと、南台で聖なる光をみたことがドラマティックな文章で記され、読み物として人を惹きつける。

実際、今回の中国旅行はこの『三代実録』卒伝を読んだことがきっかけであった。旅行の全行程についてはすでに赤間恵都子氏が『十文字国文』第十六号（平成二十二年三月刊）に記されているので、ここでは今回の旅行について『三代実録』の記述を中心に、

円仁在唐の足跡のうちから赤山法華院と五台山で訪れた場所についてその経緯を記しておきたい。以下、旅程順とは異なるが、次の順に述べていくこととする。

1. 赤山法華院
2. 定普通院
3. 五台山・台懷鎮
4. 五台山・北台
5. 五台山・南台（附、靈仙三藏）

## 1. 赤山法華院

京都比叡山の麓に赤山禪院という寺がある。最初に訪れたときからどこか異質さを感じる寺であった。後にこの寺が山東半島突端にあった赤山法華院の祭神、赤山大明神を勧請したものであると知り、またそれが円仁にとって、在唐中、物心両面で大きな支援を受け、五台山へ行く契機となった寺院であることを知った。

この寺は九世紀に唐・新羅・日本にまたがって海上貿易を行った新羅人、張保皐チャンボコによって建立されたものである。『続日本後紀』に「張宝高」という名で登場している。承和九（八四二）年正月十日条はかなり紙幅を割いて「張宝高」が亡くなったこと、その後の新羅の混乱の状況を記述している。『三國史記』『三國遺事』などの各史料間には少なからず齟齬がみられるものの、最期は反乱を起こし、刺客閻文ヨムシヤン長（閻文）に暗殺されたという。張保皐は東アジア一帯で広く交易を行うことによって勢力を拡大し、新羅の清海鎮大使という地位から、感義軍使、鎮海將軍となった人物である。円仁の五台山への旅はそのような人物の支援があつて実現したのであつた。

現在の山東半島の赤山法華院跡には発掘調査および円仁の『入唐求法巡礼行記』などの記述から新たに再建された法華院や、史料館などがある。かなり観光を意識した施設群で、残念ながら往時からのものは何もない。しかし、岩場の多い海岸線の様子や、また名称の由来となつた赤い岩山からなる景観は、『入唐求法巡礼

行記』に記された円仁の苦勞を彷彿とさせ、円仁が書き残した景観の描写と一致する。『入唐求法巡礼行記』には暴風雨の中、岩だらけの海岸線を航行していく様が延々と綴られその壮絶さを今に伝えている。なお以下の引用文は読みやすさを優先して表記を私に改め、適宜意味を括弧内に補足した。『入唐求法巡礼行記』は平凡社、東洋文庫のものを使用した。

二日、西風吹き、とらふな縄を解いて入江を出す。風は甚だしきはなはりにして航路は磯（暗礁）に近きため、即ち出するを能わず。あた酉時（十八時）風やむ。流れに任せて海口に至りて停留し、遣わして水を汲ましむ。日没の時、船上において天神地祇をまつり、また官私こうけの絹・纈こうけ（絞染）、鏡等を船上の住吉大神に奏上す。丑時（二時）水手（水夫）一人、先より病に沈んでまさに死に臨まんとす。未だ死せざる前、其の身を纏裹（巻きつつみ）して艇（小舟）に載せ、送つて山辺に棄つ。

時化の中、何人もの水夫が病などのために、亡くなり水葬される。瀕死の水夫を泣く泣く岸に残していく。今では考えられないような過酷な船旅である。円仁は開成四年（八三九・承和六年）六月に赤山法華院に到着し、そこで、新羅僧聖林しやうりん和尚から、五台山について聞き、五台山が天台山上に劣らぬ仏教の聖地であり、天台宗の高僧が五台山に居ること聞かされた。そこで円仁は勅許がおりない天台山へ行くことを諦め、五台山へ向かうことを決意するのである。一冬を過ごし、翌開成五年（八四〇・承和七年）四月に五台山へ向かつて出発する。赤山法華院は円仁の五台山巡礼にあって、まさにその出発点となつた場所であつた。

今回の旅でこの赤山法華院にこだわったのにはもう一つ大きな理由がある。「海神」という韓国歴史ドラマは先の張保皐を主人公としたものである。内容はテレビドラマなので当然、かなり創作されており、史実とは異なること、日本の時代劇「水戸黄門」に勝るとも劣らない。しかし、このドラマを見なければ、私の心の中に張保皐という人物は、特に印象に残ることはなかったのも

事実である。そしてこのドラマを見て後、私は張保皋という人物の史実に記録された正確な記述を知りたいと思ったのであった。一体どのような歴史記述を土台として創作されたのであろうか。その追求の過程で張保皋が円仁の入唐に多大な影響を及ぼした人物であったことを知ったのである。ドラマ「海神」に円仁は登場しないが、しかし史実は円仁との関わりを記している。円仁と張保皋、興味深いこの二人の接点である赤山法華院は、通常の観光コースではないため、この機会を逃したらおそらくは訪れることはできないであろう。それが、今回の旅程にあえて赤山法華院を組み込んだ理由であった。

## 2. 定点普通院

円仁は二月十九日に赤山法華院を出発し、半島の北側を辿って五台山へ向かった。しかし、私たちには歩いていく時間はないので、一度青島に戻り、空路、五台山最寄りの空港がある太原（山

東省省都）へ飛んだ。太原から五台山まではバスで四時間程の行程である。

円仁は四月二十八日に「定点普通院」に達して始めて五台山中台の頂を望む。「普通院」とは五台山に巡礼する人々を泊める場所として、いくつかあったようである。円仁が宿泊したその「普通院」でなくとも、どこかの「普通院」跡に寄りたいたいと思ひ、調べたところ、鉄保村がその跡であるらしいと判明した。鉄保村は太原から五台山へ向かう現在の通常のルートからは少々外れているが、円仁の時代から続く五台山参詣の道であるという。時間的に無理があったようであるが、五台山のガイドの郝志勤さんが無理をして調整してくれた。午後遅く、鉄保村に到着。但しその前に検問があった。国慶節が近く、警備を強化しているところに、通常観光バスなどが走らないルートを走っていたため止められたらしい。全行程ガイドの龍海鷹さんと五台山ガイドの郝さんが事情を説明している間、全員バスポートチェックを受けた。国情の違いを強く意識させられた出来事であった。

鉄保村はごく普通の中国の村である。古道といわれる道も、現在では舗装されたただの舗装道路である。しかしその道は姿こそ変えているものの千年以上も前から道であり続けた場所と知るとどこか特別の道のように感じられる。村もただの村ではなくなってくる。とはいえ鉄保村の真の魅力は歴史のロマンにのみあつたわけではない。歴史ロマンに浸る前に、村の入口付近で、人々が

国慶節のために焼いていた月餅に魅了されたのであった。その至福の味は、この旅行の忘れられない思い出である。

## 3. 五台山・台懷鎮

五台山では円仁が滞在したという大華嚴寺をはじめ、『三代実録』に記述されている獅子が出たという北台、聖なる光をみたという南台、以下残りの台、円仁が訪れた寺々、そのすべてをまわったかったのであるが、その時間はない。厳選して、願通寺（大華嚴寺）、竹林寺、金閣寺、靈鏡寺等をまわることになった。日程

の都合で靈鏡寺からまわったがこれについては後述する。

夕刻に五台山に到着したため、翌日から五台山台懷鎮にある諸寺をまわる。現在、五台山にはラマ教の寺も多く混在し、円仁のころの様相とは全く異なっているという。ちなみに現在ではラマ教という呼称ではなくチベット仏教と呼ぶよう推奨されているとのこと。五台山には明の永楽帝（在位一三六〇—一四二四）の頃に入ってきたと言われている。従って円仁の頃はなかったということになる。現在ではいわゆる普通の仏教（青教）とチベット仏教の唯一の共通の聖地となっていることである。

中国では周知のように、たびたび大規模な仏教弾圧が行われ、円仁の時代にも「会昌の廃仏」と呼ばれる大規模な仏教弾圧があった。これは八四〇年に即位した武宗が道教に傾倒して、仏教や景教などの外来宗教を弾圧したもので、八四五年（会昌五年・承和二年）四月から八月まで行われた。円仁は日本に帰国することになったのも、この弾圧のためである。そのときの様子を『三代実録』では次のように記している。

押衛等、諸官人を引いて、(円仁たちを)門前に迎え待ち、特に勞問を致す。みないわく「我が国の仏法、既に滅尽す。仏法、和尚(円仁)に随したがいて東に去る。今より以後、若し法を求むる者あらば、必ずまさに日本国に向かうべきなり」と。

五台という名称は中台および東西南北の台から成り立っているためである。五台山の中心地は台懷鎮と呼ばれているが、台とは別である。この台懷鎮の中心にあるのが菩薩頂と呼ばれる場所である。諸堂・院が塀を接して、延々と続いている。チベット仏教の寺と青教、つまり私たちが認識する普通の寺が混在し、チベット仏教と青教の僧侶が連れ立って歩いている情景も目にした。チベット仏教もそもそも仏教の一派であるので考えてみれば不思議ではないのであるが、日本では見かけることが少ないため、慣れるまでは違和感があった。

台懷鎮にある顯通寺が、円仁が滞在した大華嚴寺の現在の姿で

ある。その横にある塔院寺はもともと顯通寺に附属していたが、今はチベット仏教の寺院となっている。塔院寺の白亜の塔は、台懷鎮でも特に目立つものである。

旅程にはまた殊像寺参拝が予定されていた。この寺は元代に創建されたという。つまり直接円仁とのつながりはない。しかし殊像寺には現在五台山最大の文殊菩薩像が安置されているという。

五台山は全山文殊菩薩を祭る聖地であるので、殊像寺の参拝は欠かせないようである。とはいえ五台山に来ながら、一つの台にも行くことができないのは大変残念なことであった。そこでガイドの郝さんに、殊像寺見学の間、希望者だけでも別途中台に行くことはできないか相談してみた。中台はその名が示す通り、五台山真中にあるので或いは五つの台を見渡すことができるのではないかと考えたからである。しかし郝さんの言によれば一行を二手に分けることはできないこと、および中台へ行くには非常に時間がかかり、殊像寺をとりやめても無理であるとのことであった。そこで、中台でなくとも、五台を見渡せる場所に行くことはできない

いか、再度たずねたところ、詰まっている日程の中、午後一番に車で最高峰の北台へ行けるように手配してくれたのであった。

#### 4. 五台山・北台

北台は五台山で最高峰の台である。標高三〇五八メートル、ほぼ富士山に近い。私たちは二台の車に分乗して、細い石畳の道を一気に上まで登った。道にはガードレールなどついていない。

『三代実録』には、円仁は一夏を大華嚴寺の涅槃院で過ごし、北台へ行くこうとして獅子に出会ったことが書かれている。獅子は恐ろしい姿で、円仁の行く手にうずくまっていた。円仁はそれを見て逃げだし、何度か戻ったが、獅子はそこを動かない。ただ数刻の後、人が近づいてくるのを見て、立ち上がって、霧の中に去っていったとある。

円仁大華嚴寺の涅槃院に住み、一夏を経過す。北台に到るに

なんなんとして、雲霧、山に満ち、経路たずねがたし。霧氣開霽かいせいして、すなわち路の前をみるに、一獅子を見る。其の形甚おそだ怖畏おそるべし。円仁却しりぞき走ること三里ばかり、小時を経て、更に復た路を進む。彼の獅子猶前の路に在り、蹲踞そんきょして動かざるを見、復た却しりぞき走ること三里ばかり。いよいよ驚恐おそれ増す。数刻の後、また漸く進み行くに、獅子猶去らず。遙かに人の来るを見、すなわち起立して重なる霧の中に入る。復た見る所なし。

この記述のあと、『三代実録』には円仁が志遠和尚・玄鑒和尚に会い、止観を学び、教典を写し取ったと記される。

『入唐求法巡礼行記』では大華嚴寺の涅槃院に入って賢座主の止観の講義を聴き、そのときに志遠和上に会ったこと、志遠和上と話をし、その後何人もの高僧に会ったことが綴られている。そして翌日、円仁は堂にある大聖文殊菩薩の像を礼拝した。獅子に騎乗した像であり、その獅子には魂があるかのようであったと

書かれている。堂の僧からこの像の由来と靈験があることを聞く。

現在では勿論、往時においてさえ、五台山は獅子の生息地ではない。『三代実録』の記述は円仁が記した文殊菩薩の獅子の記録から円仁が仏法を学びとるにいたるまでを短い文章の中で効果的に綴ったものと思われる。

『入唐求法巡礼行記』が伝える北台の頂には、堂があり、池があつて、台の中心には則天武后の鉄塔がある。草が地上を覆つて樹木はない。各方向に谷底を望み、また路辺には燠石があるという。現在の北台頂にも堂があり、池もあるがどちらも新しく造営されたものである。則天武后の鉄塔はない。草が地面を覆つて樹木はなく、各方向、はるかに谷底が見渡せる。新しい堂の前には石炭の山があつた。燃料として欠かせないという。燠石しょうせきである。台頂からは東西南北すべての頂が見渡せる。当日は雲一つない快晴であつた。紺碧の空の下、五台山のやまなみが見渡す限り続いている。その風景は私がいまだかつて見たことがないほど広大なものであつた。

## 5. 五台山・南台（附 靈仙三蔵）

円仁は、四月に五台山に入つて中台を臨み、山内で夏を過ごし、七月に長安に向かうために出発した。五台山で訪れた寺は竹林寺をはじめ、大華嚴寺、王子寺、王花寺、菩薩寺、金閣寺、七佛教院、靈境寺、法花寺など延々と続く。私たちはそのうちの金閣寺に行った。京都鹿苑寺の金閣を連想するが、こちらの金閣寺という名称は創建当初屋根に銅の瓦を葺き、上に金を塗つたためという。唐代七七〇年の創建である。今は昔からの建物はなく、現在の寺院諸堂は、建てられからそれほど経つてはいないようである。壮麗ではあるが、金色に輝く建物はない。

円仁は金閣寺の菩薩院に宿泊し、その僧から日本国の靈仙三蔵のことを聞く。昔この金閣寺に住み、のちに七仏教誠院に行き、そこで亡くなつたと聞かされる。私たちは堂の外側にある日本人の僧によつて建立された靈仙三蔵の碑を見学した。金閣寺の正面から五台山脈の山々の頂がいくつつかみえる。そのうちの一つが現在の南台、別の一つが古南台であるとのことである。円仁が到

つたのは当然のこと、古南台の方であろう。『三代実録』には円仁が七月に南台へいき、黄昏時に聖なる灯を見たと言われている。その灯はあまねく五台を照らし、一つ一つの台頂をくつきりと照らし出したという。

秋七月に至り、南台に巡礼す。黄昏時に至り、忽ち聖燈を見  
る。一燈の光、普く五台を照らす。一々分明なり。五更に至  
り、聖燈、滅して現れず。

「五更」とは午前三時から午前五時頃にあたる。聖燈は夕方から明け方まで見えていたことになる。

『入唐求法巡礼行記』には南台の嶺上の空中に聖燈が輝くの見  
その大きさは初めは鉢ほど、後に小屋程になつたとある<sup>1)</sup>。更に  
もう一つの燈が谷の近くに現れ、初めは笠のようで、その後大き  
くなつたとある。二つの燈は十丈ほどの焰があつたという。

初夜「南」臺の東に一谷を隔て、嶺上の空中に聖燈いっさん一盞ある  
を見る。衆人は同じく見て礼拝す。其の燈光初めは大き鉢ば  
かりの如く、後は漸く大にして小屋の如し。大衆は至心高声  
に大聖の号を唱う。更に一盞燈ありて谷に近く現わる。且初  
めは笠の如く向後漸く大なり。兩燈は相去り、遠く望めば十  
丈ばかりの焰ありて光焰然ゆ。直ちに半夜に至り、没して現  
われず<sup>2)</sup>。

こちらでは夕刻から真夜中までとなっている。この記述からすると慧星であろうか。実際に目撃したと考えられる書き方なので、奇跡などではない。『三代実録』では、先の獅子の話と同様、この聖燈の記事のあと、円仁が多くの高僧にあつて、仏法を学んだことが列挙されている。そしてそのあと『三代実録』は合昌の廢仏、円仁の帰国へと話を続けている。

さて、先に触れた靈仙三蔵は『日本後紀』に三箇所「靈仙」とその名が記されている<sup>3)</sup>。靈仙三蔵は日本人としてはただ一人

三蔵法師となった僧といわれ、ここ五台山麓の靈境寺において、毒殺されたと伝えられている。八二八年以前に亡くなっていると考えられているので円仁が訪れる十二年以上も前のこととなる。殺害の理由については所持していた金を狙われたとか、唐の宮中の何らかの政争に関わっていたためであるなどと言われているようである。ガイドの郝さんによれば、現在中国の研究者の間では後説が優勢とのこと。靈仙は当初五台山金閣寺に滞在しながら、更に南台麓の辺鄙な靈鏡寺に移り、それでもなお死から免れなかったことから後者の見解が有力であるとのことである。靈鏡寺へは日程の関係上、五台山に入る前日に訪れた。これも、現在復元中である。往時の遺物は何も残っていない。靈鏡寺から少し離れたところに白い塔が建てられており、それは近年日本人の手によって建立された靈仙三蔵の塔であるとのことであった。靈仙の正確な埋葬地は不明である。円仁が靈仙三蔵の墓所を尋ねたとき、寺の僧は弟子達が仮に埋葬はしたが、その場所はわからないといったという<sup>13</sup>。

なお、円仁も訪れた竹林寺であるが、現在の竹林寺は全寺域にわたって、大規模な復元工事中であった。唐代の様式で復興することである。重機がそびえる工事現場は往事を偲ぶという状況ではなく、現代中国のエネルギーに圧倒されるばかりであった。円仁は竹林寺について、「竹林寺には六院ありて、律院、庫院、花嚴院、法花院、閣院、仏殿院あり。一寺にはすべて四十ばかりの僧あり。此の寺は五台に属せず」と記している。五台山のほぼ中央に位置しながら、「五台に属せず」という点について、『入唐求法巡礼行記』補注では、或いは竹林寺が唐代以降五台山に属したからか、天下二カ所のみの戒壇を有するので別格本山的存在であったからかと推定している<sup>14</sup>。円仁が訪れた竹林寺については斎藤忠氏の『中国五台山竹林寺の研究』に詳しい<sup>15</sup>。

### さいごに

円仁の『入唐求法巡礼行記』には五台山の自然の様子が、詳細

に書かれている。全山、柔らかい草が茂っており、香しい薫りが山に満ちていると書かれる。実際に五台山は全山、いたるところに香草が生え、足を踏みしめれば当たり一面に香しい薫りが漂う。私たちが訪れたのは九月であったので、花の盛りは過ぎていたが、七月から八月には、香草の花々は咲き乱れ、それは美しい山であるという。円仁が五台山を巡ったのは四月から七月であったから山に香草が茂り、花々が咲き乱れていたことであろう。円仁が聖地にたどり着いた感激もさることながら、実際に聖地にふさわしく全山香氣に満ちていることを体験して、その感激はどれほどのものであったか、想像に難くない。

奇花、異色は山に満ちて西は開き、谷より頂に至る。四面は皆花にして、なお錦を敷けるがごとし。香氣は芬馥（さかん<sup>かんぐく</sup>に香り）として人の衣装に薫<sup>あまね</sup>す<sup>16</sup>。

山中は多く寒けれども、五、六、七月には、遍<sup>あまね</sup>ねく五臺五

百里の内には奇異の花開敷<sup>かいふ</sup>して錦の如し。満山遍谷は香氣<sup>かんぐく</sup>薫<sup>あまね</sup>たり<sup>17</sup>。

以上である。これまでたびたび「瞿麦」に掲載させていただいた旅行記の内、初めての海外の旅であった。種々の制約があり、円仁の足跡を忠実になぞることはできなかったが、円仁が五台山で体感したことを、わずかながらも感じ取ることができたのではないかと思う。

注

<sup>1</sup> 国史大辞典「慈覚大師伝」

<sup>2</sup> 『続日本後紀』承和七年（八四〇）十二月二十七日条、同八年（八四二）二月二十七日条、同九年（八四三）正月十日条。

なお、どちらの表記でも朝鮮語では「チャンボゴ」となるようである。

<sup>3</sup> 『入唐求法巡礼行記』1、一六八頁

<sup>4</sup> 韓国KBS制作。二〇〇五年に放映された。チョ・インホの同名小説を原作としている。

5	『入唐求法巡礼行記』 2、五頁
6	一九四九年十月十日に天安門広場にて、中華人民共和国建国の式典が開かれ、毛沢東が成立宣言を行ったのにちなむ祝日。十月十日。
7	『入唐求法巡礼行記』 2、七頁。
8	『入唐求法巡礼行記』 2、三六頁。
9	『入唐求法巡礼行記』 2、六二頁。
10	『入唐求法巡礼行記』 2、六八頁。
11	『入唐求法巡礼行記』 2、六八頁。
12	『日本後紀』天長三年（八二六）二月二十九日条、天長三年（八二六）三月一日条、天長三年（八二六）五月十五日条。
13	『入唐求法巡礼行記』 2、七十頁。
14	『入唐求法巡礼行記』 2、二十頁（補注）
15	斎藤忠『中国五台山竹林寺の研究』（一九九九年・第一書房）
16	『入唐求法巡礼行記』 2、三十四頁
17	『入唐求法巡礼行記』 2、六十七頁。